

19世紀アメリカ女性労働史の研究

野 村 達 朗

〔I〕 アメリカ女性史の研究

(1) **女性史研究の隆盛**——「女性史研究における驚くべき事実は、歴史家による女性の全般的無視である。権力の行使だけが歴史家の関心に値するという伝統的見解にしがみついた限り、女性は必然的に無視される。政治史、外交史、軍事史の中には女性の占める場所はほとんどなかったからである」。このように Gerda Lerner が嘆いたのは1969年のことであった⁽¹⁾。それからアメリカにおける状況は大きく変わった。日本では有賀夏紀が1985年『歴史学研究』誌上でその変貌の大きさを紹介した⁽²⁾。

(2) **アメリカ女性史の枠組み**——隆盛を極めるようになったアメリカの女性史研究はほぼ次のような解釈の枠組みを生み出した。自給自足性の強かった前近代の「伝統的家族」は生産活動の単位であり、主婦の仕事は家事育児だけでなく、多様な家庭必要品の製造を含めて生産的性格が強かった。ところが市場革命の進展が家族の性質を変えた。商品経済の進展、製造工業の発展とともに家庭は生産的性格を失い、消費のみの場となり、職業と住居の分離が起こり、「男は仕事、女は家庭」という男女間分業が明確になり、女性は専業主婦となり、「近代的家族」が成立した。それは男女間の愛情に基づく婚姻、夫が生計を稼ぎ、妻が家事と育児に専念するような夫婦間の分業、子供を大切に、比較的少人数の家族であることを特徴とした。都市中産階級の間に普及したこのような家族像が全社会的規範として見られるようになった。

中産階級的女性の理想像の崇拜が生じ、敬虔 (piety)、清純 (purity)、従順 (submissiveness)、家庭性 (domesticity) という「真の女らしさ」(“true womanhood”)を構成する4つの美德が女性を判断する基準となり、女性は家庭の外で働いて疲れて帰ってくる夫を暖かく慰め、再生させる天使のような存在でなければならないとされた。子供の数が減って家庭における女性の負担も軽減され、とりわけ家事使用人を雇う家庭の主婦はある程度の閑雅に恵まれた「淑女」(lady)となった。主婦は「女の領域」としての家庭において実権を握るようになり、「家庭内フェミニズム」(domestic feminism)が成立した。男女がそれぞれの「領域」をもったことは、政治や経済などの公的領域からの女性の排除をもたらしたが、同時に女性は自分たち自身の「女の世界」を作り上

げ、女性の連帯意識が強化され、これが女性解放運動が成立する前提となったというのである⁽³⁾。

(3) **中産階級女性の研究に集中**——このようなアメリカ女性史研究の多くは19世紀の北東部都市の中産階級女性に集中してきた。その理由としては「女らしさのヴィクトリア朝的理想の発展の面白さ」や、女性参政権運動を中心とする19世紀フェミニズムの担い手が上層中産階級女性だったことなどが挙げられている⁽⁴⁾。1986年に翻訳刊行されたカール・デグラール他著『アメリカのおんなたち——愛と性と家族の歴史』(立原宏要訳, 教育社, 1986年) [Michael Gordon, ed., *The American Family in Social-Historical Perspective* (St. Martin's Press, New York, 1983) に基づく] は、まさにそのようなアメリカ女性史を典型的に示すものであった。しかし移民, 労働者, 黒人, フロンティアの女性の場合には, そのような中産階級の女性の理想像は当てはまらなかった。賃金労働せざるをえない多くの女性が存在したのである。ところが女性史研究も労働史研究も長らく女性労働者にはあまり関心を寄せなかった。女性史研究は中産階級女性に集中し, 労働史研究は組織された男性労働者に関心を寄せてきたからである。

〔II〕 研究前史

(1) **以前の女性労働研究**——ところが女性労働に関する研究は実は豊かな前史を持っていた。20世紀初頭の革新主義時代を中心に, 労働問題への関心の高まり, 女性参政権獲得をめざす第一波フェミニズムの高まりを背景にかなりの調査研究がなされた。この中では Edith Abbott, *Women in Industry: A Study in American Economic History* (New York, 1910) が女性労働についての経済史的著作として良く知られている。女性労働についての政府による調査としては, Joseph A. Hill, *Women in Gainful Occupations, 1870 to 1920* (Census Monographs, No. 9, Government Printing Office, Washington, D.C., 1929) があり, 連邦議会上院の文書としては U.S. Congress, Senate, *Report on Condition of Woman and Child Wage-Earners in the United States*, 19 Volumes (Government Printing Office, Washington, D.C., 1910-13) があり, このうちの第9巻は Helen L. Sumner, *History of Women in Industry in the United States* (1910), 第10巻は John Andrews and W. D. P. Bliss, *History of Women in Trade Unions* (1911) であった。

その他, 当時刊行された主な著書を年代順に列挙しておこう。Lucy Maynard Salman, *Domestic Service* (Macmillan, New York, 1897); Dorothy Richardson, *The Long Day* (1905); Massachusetts Women's Trade Union League, *The History of Trade Unionism among Women in Boston* (WTUL, Boston, 1907); Elizabeth B. Butler, *Women and the Trades: Pittsburgh, 1907-1908* (New York, 1910); Annie Maclean, *Wage Earning Women* (Macmillan, New York, 1910); Margaret Byington, *Homestead: The Households of a Mill Town* (New York, 1910); Elizabeth B. Butler, *Saleswomen in Mercantile Stores: Baltimore, 1909* (Charities Publication Committee,

New York, 1912); Clara Laughlin, *The Work-a-Day Girl* (1913); Katherine Anthony, *Mothers Who Must Earn* (Russell Sage Foundation, New York, 1914); Louise Odencrants, *Italian Women in Industry: A Study of Conditions in New York City* (Russell Sage Foundation, New York, 1919); Josephine Donovan, *The Woman Who Waits* (1920); Alice Henry, *Women and the Labor Movement* (George Doran, New York, 1923); Josephine Donovan, *The Saleslady* (1925)⁽⁵⁾。

(2) **研究の衰退**——ところが1920年における女性参政権の獲得以降の女性運動の衰退とも関連して、女性労働に関する研究は低調となった。John R. Commons とその弟子たちによって樹立された「旧労働史学」は労働組合の制度史的研究を軸にしたために、女性労働者はほとんど無視された。それでも多様な人々が女性労働者に関心を寄せ続けていた。良く読まれてアメリカ女性史研究への関心を一挙に高めた先駆的著作となった Eleanor Flexner, *Century of Struggle: The Woman's Rights Movement in the United States* (Ballantine Books, New York, 1959) は3つの章で労働組合運動と女性との関係を扱っている。

(3) **女性労働史研究の本格的開始の背景**——1960年代末以降、女性労働史研究は本格的に開始された。それには大きな背景があった。1960年代における第二波フェミニズムの興隆を背景とした女性史研究の隆盛だけでなく、女性の労働力参加が爆発的に増大し、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担が崩壊し始めたという事情があった。第二には1960年代以来労働史研究が労働組合史を中心的な内容とした「旧労働史学」から「労働者階級史」としての「新労働史学」へと変容したことが挙げられる。Ava Baron が述べたように、「新労働史学は女性労働者の研究にとっての可能性を開いたのである⁽⁶⁾。女性史研究の側からは Gerda Lerner が“Lady and Mill Girl: Changes in the Status of Women in the Age of Jackson,” *Midcontinent American Studies*, Vol. 10 (Spring 1969) [pp. 5–14] において、女性史における階級的違いに注意を促して、アメリカ女性労働史研究への道を開いた。他方、労働史研究の側からは例えば Herbert Gutman が女性史を研究しようとする大学院生たちの努力を励ました。Susan Levine によれば、「他の教授たちが史料がないから女性史は研究出来ないと大学院生に告げたのに、Gutman は史料は多すぎるのだから、トピックを狭めるように学生に注意した」のだった。こうしてアメリカ女性労働史研究は1970年代になってから本格的に開始されたのである⁽⁷⁾。

【Ⅲ】 アメリカ女性労働史全般についての著作

(1) **概説書**——多くの著作が刊行された。概説書としては Barbara Mayer Wertheimer, *We Were There: The Story of Working Women in America* (Pantheon Books, New York, 1977) が、植民地時代以来の多様な種類の仕事に従事した女性たちの姿、そして抑圧的環境を変えるための女性労働者の活動、賃金・労働条件改善のための闘いを描いた。Susan Estabrook Kennedy, *If All We Did Was to Weep at Home: A History of White Working-class*

Women in America (Indiana University Press, Bloomington, 1979) は、多くの資料に基づいて生き生きと白人労働者階級女性の歴史を描いた。IWWの指導者、ILGWUの指導者と親しかった著者の筆は感銘を引き起こす。画期的だったのは Alice Kessler-Harris, *Out to Work: A History of Wage-Earning Women in the United States* (Oxford University Press, New York, 1982) であり、植民地時代から現代にいたる女性労働史について密度の濃い叙述を展開した。彼女によれば、アメリカ史を通じて女性労働者は多様な差別と抑圧の犠牲者だったが、彼女たちはその抑圧的地位を受動的に受け入れようとはせず、主体性に行動してきたというのである⁽⁸⁾。

(2) 論文集——女性労働史に関する論文集としては Milton Cantor and Bruce Laurie, eds., *Sex, Class, and the Woman Worker* (Greenwood Press, Westport, Conn., 1977) には Caroline Ware が序論を書き、Alice Kessler-Harris をはじめとする錚々たる研究者たちの論文10点が収録されている。Carol Groneman and Mary Beth Norton, eds., *"To Toil the Livelong Day": America's Women at Work, 1780-1980* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1987) は、日本でも良く知られているメアリー・バス・ノートンが編者の一人となっており、1984年の女性史パークシャー会議での報告に基づく17論文を収録している。また Ruth Milkman, ed., *Women, Work, and Protest: A Century of U.S. Women's Labor History* (Routledge & Kegan Paul, Boston and London, 1985) も良く知られている。また *Labor History*, Vol. 34, No. 2-3 (Spring-Summer 1993) は、"Men, Women, and Labor: Perspectives on Gender in Labor History" と題して1991年にデトロイトのウェイン・ステート大学で開催された北米労働史会議で報告された11の論文を収録している。Rosaly Baxandall, Linda Gordon, and Susan Reerby, eds., *American Working Women* (Random House, New York, 1976) は原資料のコレクションである。

(3) 理論的枠組みをめぐる——アメリカ女性労働史の枠組みを探求した幾つかの著作が現れた。Julie A. Matthaei, *An Economic History of Women in America: Women's Work, the Sexual Division of Labor, and the Development of Capitalism* (Schocken, New York, 1982) は植民地時代以来のアメリカ女性の労働史をマルクス主義的手法を導入して論じた経済史の著書である。Ava Baron, ed., *Work Engendered: A New History of American Labor* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1991) において編者の Baron は、その第一章において、「新労働史学」の場合でも男性研究者が「労働者」("worker") という時、男性労働者を意味しているとして批判し、階級や人種と並んでジェンダーが歴史の因果関係を解き明かすにあたっての重大な概念であるとして、労働史はジェンダーを分析の中に統合するように方向を替えねばならないことを力説した⁽⁹⁾。Claudia Goldin, *Understanding the Gender Gap: Economic History of American Women* (Oxford University Press, New York, 1990) については、新労働史学の開拓者たる David Brody が「我々はアメリカにおける女性の仕事の経済史についての本格的な体系的取り扱いを初めて持った」と絶賛しているが、特徴的

な事柄は、若い未婚の女性による労働参加の高い比率→結婚または第一子の誕生による労働参加の急落→子供の成長による労働力への再参入→退職年齢による低下といういわゆるM字型カーブを数量的研究により修正し、既婚女性の労働参加についてU字型を提唱したことで注目された⁽¹⁰⁾。

(4) **本稿の目的**——本稿はアメリカ労働史学の歴史に関する筆者の論文シリーズの一部として、アメリカにおける女性労働史についての研究を19世紀を中心に例示しようとするものである。佐藤千登勢、また上杉佐代子の両氏による研究動向紹介からも学ばせて頂いた⁽¹¹⁾。ここでは著書を中心にして諸文献を紹介するが、筆者が実際に読んでいない書物についてはかなりの量の書評を参照した。20世紀のアメリカ女性労働史の研究については次稿に委ねることにしたい。なおエスニシティと女性労働に関係する問題については、筆者は前に「女性の労働参加とエスニシティ」と題して書き、またユダヤ系については著書において触れたことがあるので、ここではごく簡潔に触れるにとどめることにする⁽¹²⁾。

[IV] 19世紀女性労働史をめぐって

(1) **女性労働者の存在の認識**——女性労働史研究の出発点は、資本主義的階級社会の必然的現実として経済的必要から賃労働せざるを得ない女性が多数存在したという認識であった。前述した Gerda Lerner の論文題名「レディ・アンド・ミル・ガール」、B. M. Wertheimer の女性労働史概説の題名『私たちはそこにいた』にそれが示されている⁽¹³⁾。そして Carl Degler は Glenn Porter, ed., *Encyclopedia of American Economic History* (Charles Scribners, New York, 1980) [pp. 988-1000] における“Women”と題するアートを女性の労働参加の歴史の説明に充てたのだった。「男は仕事、女は家庭」が19世紀における男女関係の支配的図式だったから、男は家族の生計を維持するのに必要なだけの賃金＝「家族賃金」を支払われるべきだと労働運動は主張した。しかし「家族賃金」は「実現をめざす理想」であっても、「実現された現実」ではなかった。したがって多くの女性が家庭の外で賃金を稼がねばならなかった。しかし女性労働は一時的労働と考えられ、労働女性の大部分は若い未婚の女性だった。Degler (p. 992) が挙げている数字であるが、1888年に連邦政府が行なった22の都市の約1万7000人の労働女性（家事使用人および繊維工場労働者を除く）の調査では、最も多いのは18歳であり、労働開始年齢は15歳だった。仕事についている平均的期間は5年以下だった。そして88.3%は独身、5.6%は寡婦、4.3%が結婚していた。また労働女性の85.6%は自分の家に住み、賃金の全部または一部を家に入れていた。結婚すれば仕事を止めるというのが普通だったのである。しかし一人で自活するか、子供や親、親族を独力で扶養する女性たちもいた。女性の賃金水準は低かったから、女性家長世帯は困窮を極めたのである。

(2) **家庭の外で働く女性労働者の諸性格**——女性が従事した職種は織物労働、家事奉

公、教師など、家庭における女性の役割の延長という性格をもっていた。女性の職は熟練や訓練をさほど必要とせず、昇進の可能性はほとんどなかった。どんな職業にも性差別が広がっていた。熟練を要する高賃金の仕事は男性が独占した。女性の平均賃金は男性の平均賃金の半分ほどだった。低賃金の理由としては、①女性が低賃金の職種や産業に集中していたこと、②彼女たちが男性ほど長い期間その職に留まらなかったこと、③若い未婚の女性が大多数であり、彼女たちは自分の家族の家庭に住んでおり、「ピン・マニー」を稼げばよいと考えられていたことなどが挙げられた。労働組合は男性の熟練労働者の領域であり、女性の組合参加は低いレベルに留まっていた。

このような事実が次々に明らかにされ、女性労働者が差別された存在であったことがえぐり出されていった。男性は家族の長、金銭の供給者としてより良い職を独占しようと努めた。男性はしばしばその「男らしさ」(manliness)を彼らの熟練、習熟、あるいは雇用上の地位と結びつけ、そうすることで彼ら自身の職種から女性を排除しようとした。要するに女性労働に関する大部分の研究は、幾らかの例外を認めながらも、19世紀の女性労働は恵まれざる犠牲者だったと主張したのであり、そして被抑圧者としての女性が平等の権利をかちとるための闘争を明らかにすることが研究者の責務であると考えられたのである。

(3) 家族内義務と賃労働——ところで女性労働に関連して強調されるべきことは、女性に伝統的につきまってきた家族的義務との関係である。Degler はアメリカ女性の労働の歴史を概観した後、「経済における女性の歴史を考察すると一つの大きな特徴が浮かび上がって来る。それはアメリカの女性がアメリカ経済における自分たちの仕事を、家族の中の自分の役割に適合できるように削って形を整えてきたということである」と述べた。そして女性の労働参加率が男性のそれよりもいつも低かったこと、結婚と家族生活が女性を賃労働から排除する作用を及ぼしたこと、女性は家族における伝統的な役割を否定することなく、何らかの妥協を計りながら、賃金労働に従事してきたことを指摘した⁽¹⁴⁾。

女性労働史研究は家庭の外での公的領域における賃金労働だけでなく、統計に表れることのない、あるいは表れることの少ない「非公式労働」にも目を向けるようになった。I・イリイチが『シャドウ・ワーク』[玉野井芳郎・栗原杉訳、岩波書店、1982年]において論じた問題である。女性は「非公式経済」で働く場合が多かったのである。その最も重要な部分は「主婦労働」であった。第二に女性は家庭の内部で「内職」を行い、一家の収入を増やした。第三に主婦は家庭菜園での野菜栽培その他、様々な工夫によって家計のやりくりを行なったのだった。

家族員としての女性と女性労働との関連をめぐる議論において重要視されている著作としては Louise A. Tilly and Joan W. Scott, *Women, Work, and Family* (Holt, Rinehart and Winston, New York, 1978) が挙げられる。筆者未見であるが、書評によれば、本書は社会

史の手法を用いて18世紀から20世紀半ばにいたるイギリスおよびフランスにおける労働者階級女性に対する工業化のインパクトを検討したものであり、家族史の3つの段階と結びついた女性の経済的役割の変化を論じたものだという⁽¹⁵⁾。

(4) **女性労働史研究に生じた微妙な変化**——しかし女性労働史研究が成熟するにつれて、微妙な変化が色々と現れてきた。はじめ女性労働史の研究者たちは女性が差別と抑圧の犠牲者だったという側面を中心に説明したが、研究が進展するに伴い、もっと多面的な、そして女性労働者の積極的な主体性を強調するようになるとともに、家庭イデオロギーの影響の強い存続を強調する論者も出てきた。これらの点については、19世紀女性労働史に関する各論を紹介した後で考えてみることにしよう。

〔V〕 家庭の内部において

(1) **家庭における労働についての従来の捉え方**——家庭において女性は仕事に励んできた。しかしその仕事は「労働」としては評価されなかった。E. T. May は次のように説明する。一般に歴史家たちは、「仕事とは金銭を支払われるものだというアメリカ文化の中に深く根ざした労働の定義」を受け入れてきた。労働とは男性が支配し、女性が欠如しているか周縁的でしかない「公的」領域における労働だった。しかし労働は賃金報酬を得るためのものとは限らないのである。近代化に伴い、男は外で稼ぎ、女性は家庭で洗濯、掃除、料理、育児を行なうようになったが、これら女性の機能は生産的とは考えられず、大部分の女性は経済的依存者と考えられた。それでも家庭における女性の不支払い労働は男性にとって、そして家族の経済生活にとって必須のものだったのであると⁽¹⁶⁾。

(2) **仕事と家庭という単純な二元論の拒否**——こうして仕事と家庭という単純な二元論を拒絶しようとする動きが出てきた。市場革命による性別役割の分業の明確化というテーゼに対する修正主義的解釈を提示したのが、Elizabeth Pleck, “Two Worlds in One: Work and Family,” *Journal of Social History*, Vol. 10 (Winter 1976) [pp. 178-189] である。要約すれば彼女は次の4点を指摘した。第一に家庭と仕事の分離は中産階級だけの特徴づけたということ、第二に家庭における生産の衰退は徐々に進行したということ、第三に市場労働は家庭の外に移動したが、非市場労働は家庭の中に残ったということ、そして第四には大きな程度まで家庭と仕事は工業化以前から分離されていたということである。具体的説明はここでは省くが、仕事と家庭の歴史を理解するためには、歴史家は「分かれた世界の神話」、工業化の下での家庭と仕事の分離に基づく諸理論を拒絶することから始めねばならないというのである。このような動きは国際的にも見られ、Karen Offen, Ruth Roach Pierson and Jane Rendall, eds., *Writing Women's History: International Perspective* (University of Indiana Press, Bloomington and Indianapolis, 1991) は22ヶ国における研究動向を論じたものであるが、書評者によれば、編者たちは女性史研究における

理論的二元論の崩壊を指摘しているという。私的と公的 (private/public), 自然と文化 (nature/culture), 仕事と家族 (work/family), 平等と相違 (equality/difference), セクスとジェンダー (sex/gender) という単純な二元論が批判されているというのである⁽¹⁷⁾。

(3) **主婦労働**——こうして家庭の外での賃金労働だけでなく、家庭内部の「非公式」労働も分析対象になってきた。その中軸は言うまでもなく主婦の家事育児労働である。労働者階級の女性も結婚すると多くが「専業主婦」となった。男性の家庭外労働を可能にしたのは、女性による食料の購入と調理、掃除洗濯、生計の管理、つまり家事労働であり、また労働者階級を再生産させるものとしての生殖と育児であった。そして「単なる主婦」(“just a housewife”) とはいうものの、19世紀においては家事は大変な量の労働を必要としたのである。主婦労働に関しては、Jeanne Boydston, *Home and Work: Housework, Wages, and the Ideology of Labor in the Early Republic* (Oxford University Press, New York, 1990); Ann Oakley, *Women's Work: The Housewife, Past and Present* (Pantheon, New York, 1975); Arlene Jossen Cardoso, *Women at Home* (Doubleday, Garden City, N.J., 1976); Glenna Matthews, *“Just a Housewife”: The Rise and Fall of Domesticity in America* (Oxford University Press, New York, 1987); Annegret S. Ogden, *The Great American Housewife: From Helpmate to Wage-Earner, 1776–1986* (Greenwood Press, Westport, Conn., 1986) があり、また Mary Beth Norton and Carol Groneman, eds., *“To Toil the Livelong Day”: America's Women at Work, 1780–1980* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1987) は、1984年のパークシャ女性史会議で報告された17論文を収録しているが、その半分は家庭内部での労働を扱っているという。

家事労働に関連した著作としては邦訳もされたドロレス・ヘイデン『家事大革命——アメリカの住宅、近隣、都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』(野口美智子、藤原典子他訳、勁草書房、1985年) [Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution: A History of Feminist Designs for American Homes, Neighborhoods, and Cities* (MIT Press, Cambridge, Mass., 1981)] がある。ヘイデンは男性による女性の家事労働の経済的搾取を女性の不平等の基礎的原因と見なしてその解決策を模索した多様な試み、すなわち社会主義都市、協同組合、台所のない家、託児所、公共的キッチン、コミュニティ食事クラブなどについて論じている。

(4) **家事育児以外の非公式労働**——女性は家事育児以外の多様な労働を家庭の内部で行なった。従来は「近代的家族」の形成に伴い、家庭は消費のみの場となり、生活の資の一切を市場での購入に依存したと想定されたが、実際には多くの家庭は多様な非公式労働で生計を補ったことが認識された。「非公式労働」には2種類あった。賃金その他の収入を稼ぐ「内職」と、賃金収入にならない労働である。後者の一つは菜園での野菜栽培である。リンド夫妻による『ミドルタウン』で有名なインディアナ州マンシーでは家族の40~60%は菜園を持っていたと Linda Gordon は述べている。農村的色彩の濃厚

だった19世紀的アメリカでは、小工業都市のかなりの労働者家庭が菜園をもっていたであろう。このような「農村的戦略」の成果として、主婦たちは野菜や鶏や卵、特にビールや酒を作って売る場合もあったのである⁽¹⁸⁾。

そして下宿経営があった。都市の労働者階級の間では移民の比率が高く、独身男性が多かったから、多くの労働者階級世帯が下宿人を置き、部屋を貸し、女性が炊事や洗濯、掃除を提供した。下宿に関する論文としては、John Modell and Tamara K. Hareven, “Urbanization of Boarding and Lodging in American Families,” *Journal of Marriage and the Family*, 30 (1973), 467-497がある。筆者もニューヨークにおけるユダヤ系移民労働者世帯の場合の下宿について紹介したことがある⁽¹⁹⁾。

(5) 内職——その他多様な内職があった。従来は工業化は生産を家庭から追い出したと説明されてきたが、産業的労働が家庭内部に導入されることも多かったのである。一つは産業資本主義が拡大していく過程の中で広範な広がりを見せた問屋制下の家庭内労働であり、一つは後々まで存続した衣服製造などに見られる家庭内での下請け内職である。後者は筆者が『ユダヤ移民のニューヨーク』(p. 127)においても紹介したことがある。また内職に関する論文集としては、Eileen Boris and Cynthia R. Daniels, eds., *Homework: Historical and Contemporary Perspectives on Paid Labor at Home* (University of Illinois Press, Urbana, 1989)がある。

産業的内職の歴史については19世紀後期から20世紀に力点を置きながら、家族の世界と産業労働の世界という2つに分かれた研究領域を結合したことで画期的とされるEileen Boris, *Home to Work: Motherhood and the Politics of Industrial Homework in the United States* (Cambridge University Press, New York, 1994) に関しては *Labor History* 誌 [Vol. 39, No. 4 (November 1998)] が「シンポジウム」を掲載した。その中の Evelyn Nakano Glenn による要約 [pp. 409-413] に基づいて紹介すると、本書は合衆国における産業的内職の歴史についての最初の本であり、内職を公的・私的、家庭と市場との境界にまたがるジェンダー化された労働の一形態として捉え、多様な内職の種類を検討している。内職が私的な世帯の内部で行なわれ、公式経済の外側にあったことの他に、内職は死滅しつつあり、経済発展の大筋からの小さな逸脱にすぎないと考えられたために真剣な研究がなされなかったが、しかしヨーロッパで問屋制家内工業が工場制度に先行したのに対して、アメリカでは工場制度と並んで問屋制生産が成長したのであり、そのために家庭内部における産業的内職が重要な経済活動として継続したというのである。また産業的内職は驚くほど多様な産業において長く存続した。内職は家庭で子供の世話をするという母親のニーズと結びついてきたが、同時に朝早くから夜遅くまで休息を犠牲にして母親が働かねばならないという状況があり、それが国家＝州による規制の対象となり、それをめぐって多様な力関係が交錯したことなどが論じられているというのである。

〔VI〕 家事使用人

19世紀から20世紀初期にいたる時期における女性の最もありふれた職業は家事使用人 (domestic servant) だった。女性家事使用人に関しては、古くは19世紀末に Lucy M. Salmon の調査が著されたが、その後長く研究の対象とされることがなかった。その点で1978年に David M. Katzman, *Seven Days a Week: Women and Domestic Service in Industrializing America* (Oxford University Press, New York, 1978) が刊行されたことは画期的であった。本書は1870～1920年の時期について家事奉公人の週7日間、朝から晩まで仕事に追い立てられる毎日の生活を生き生きと描いている。この職業の特殊性はその仕事に対する低い評価、雇い主と被雇用者との間の明確な契約の欠如、専門性の欠如、主人と女中との間の「個人化」された関係にあった。主人と使用人との関係には地域的・人種的な要因が重要であった。黒人女性労働の研究から出発した Katzman によれば、奴隷制度の遺産による黒人女性の豊富な低廉労働の存在により、南部は「主婦のユートピア」だった。人種の壁により黒人使用人は主人の家庭の親密な関係の中に侵入することがなかった。また黒人女性は結婚後も雇われ続けた。白人サーヴァントは一般に独身で、一時的使用人が多く、また民族集団的には特にアイルランド系が多かった⁽²⁰⁾。その後次々に研究文献が出た。

Daniel E. Sutherland, *Americans and Their Servants: Domestic Service in the United States from 1800 to 1920* (Louisiana State University Press, Baton Rouge, 1981) は、この職業におけるアメリカ生まれ白人から移民へ、次いで黒人の優勢へという移行を明らかにしているが、主人と使用人との関係には変化がなく、高度に個人化されたものであり、相互の責務という旧い感覚によって構成されていたと主張しているという⁽²¹⁾。Faye E. Dudden, *Serving Women: Household Service in Nineteenth Century America* (Wesleyan University Press, Middletown, Conn., 1983) によれば、19世紀アメリカの家事使用人には2つの形態が存在した。一つは主として農村や小さな町に見られた臨時的、非体系的な「ヘルプ」であり、主婦と仕事を共有し、家族と食事のテーブルを共有した。第二の形態は「ドメスティックス」であり、女主人によって監督され、明らかに劣った身分として雇われ、召使部屋に閉じこめられた。そして資本主義的関係の進展に対応して「ヘルプ」から「ドメスティック」へという変化が生じ、また女主人と召使との間の社会的距離が移民および黒人の雇用の増大によって拡大したと論じられているという⁽²²⁾。なお Donna L. Van Raaphorst, *Union Maids Not Wanted: Organizing Domestic Workers, 1870-1940* (Praeger, New York, 1988) は、雇い主側の反対、組織労働側の無関心に遭遇しながらも、家事使用人の組合組織化の努力が執拗になされたことを辿っているという⁽²³⁾。

【VII】 農業における女性労働

西部開拓により進展した農業労働と女性との関係については、後述するニューイングランドの場合を除いて、労働史研究の側からの解明はあまり進んでいないように見える。その中で農村社会学者による Caroline E. Sachs, *The Invisible Farmers: Women in Agricultural Production* (Rowan and Allanheld, Totowa, N.J., 1983) は、アメリカ農業における女性の役割の歴史的要約を描くという巨大な課題に取り組んだ書物であるとされ、家父長的制度が継続し、女性の家庭性という19世紀のイデオロギーがその性的分業をさらに励まし、女性は農業生産から離れていったと論じているという⁽²⁴⁾。ただしこの問題は人種・民族集団毎、地域毎の相違が大きかった。Joan M. Jensen, *With These Hands: Women on the Land* (The Feminist Press, New York, 1981) は先住民女性、フロンティアの白人女性、綿花プランテーションの黒人女性、ヒスパニック女性、モルモンの女性などの多様な農家の女性を扱い、彼女たちが完全な専業主婦にもなれず、キャリアを追求することも出来ず、また農業労働に夢をかけることも出来なかった状況を論じているという⁽²⁵⁾。同じく Jensen の *Loosening the Bond: Mid-Atlantic Farm Women, 1750-1859* (Yale University Press, New Haven, Conn., 1986) は中部大西洋沿岸地域の農家の女性について説明し、Nancy Grey Osterud, *Bonds of Community: The Lives of Farm Women in Nineteenth Century New York* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1991) はニューヨーク州西部の家族農場におけるジェンダー関係と仕事を調査している⁽²⁶⁾。

【VIII】 南北戦争以前の製造業

(1) ローウェルの女工たちを中心に——初期の機械制木綿工場において女性が労働力の過半数を占めたことは古くから注目を浴び、Caroline F. Ware, *The Early New England Cotton Manufacture* (Boston and New York, 1931); Hanna Josephson, *The Golden Threads: New England's Mill Girls and Magnates* (New York, 1949) などが出たが、木綿工場で働く「ミル・ガール」について社会史的手法を駆使した「新労働史学」の力作が Thomas Dublin, *Women at Work: The Transformation of Work and Community in Lowell, Massachusetts, 1826-1860* (Columbia University Press, New York, 1979) である⁽²⁷⁾。

Dublin は女工たちの出身地を辿り、出身階級や工場労働への動機を明らかにした。彼女たちはある程度の中産の資産をもったニューイングランドの農家の出身であり、性別、出身、エスニシティ、年齢などの点で同質的性格を持っていた。彼女たちはその賃金を親に渡すのではなく、自分の収入としており、ダブリンは彼女たちの独立性を強調した。しかも読書や文筆活動に見られるように女工たちの知的関心も高かった。工場の内部でも男性と女性労働者の働く場所が異なっており、仕事の場で女工は女工たちと一緒に働き、多様な形態で助け合った。また大部分が寄宿舎に居住して一緒に生活した。

彼女たちは労働と生活の両方の場において女たちの世界を形成し、連帯感を強めた。条件が悪化すると彼女たちはストライキに立ち上がった。このことに関してダブリンは女工たちが仕事の場と生活の場の両方において緊密な女のコミュニティを形成し、連帯感を強めていたことの他に、彼女たちが独立革命の精神を受け継いだ「自由民の娘」として誇り高い存在であり、権利を侵害しようとする「食欲の抑圧の手」に抗して賃下げに抵抗したことを強調する。そして彼女たちは10時間労働法制定運動において重要な役割を演じていった。しかしこの注目すべき世界もアイルランド人移民労働者の大量導入のために失われていくのである。

ローウェルの女工たちは多くの関心を集めた。代表的な旧左翼的労働史学者、Philip S. Foner が編集した史料集、*The Factory Girls* (University of Illinois Press, Urbana, 1977) にはニューイングランドの繊維工場で働いた女工たちが書いたものが多く含まれている。また日本では久田由佳子が綿密な論述を行っており、上杉佐代子はダブリンの著作の内容紹介を行なった⁽²⁸⁾。

(2) **ニューイングランド農村の女性**——娘たちを木綿工場に送り出した当時のニューイングランドの農村社会においては経済的・社会的変化が進行しつつあった。ダブリンは農村から工場へと移った女工たちの書簡集 [*Farm to Factory: Women's Letters, 1830-1860* (Columbia University Press, New York, 1981)] を編集し、また *Transforming Women's Work: New England Lives in the Industrial Revolution* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1994) を著した。ニューイングランド農村への資本主義の浸透の問題についての関心が深まり、Christopher Clark, *The Roots of Rural Capitalism: Western Massachusetts, 1780-1860* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1990); Winifred B. Rosenberg, *From Market Places to a Market Economy: The Transformation of Rural Massachusetts, 1750-1850* (Chicago, 1992); Jonathan Prude, *The Coming of Industrial Order: Town and Factory Life in Rural Massachusetts, 1810-1860* (Cambridge University Press, 1983) が刊行され、工業化の進展の中での農村社会史の研究が進展した。かなり自給自足性の強かったニューイングランド農村は、西部農業との競争、商品経済の浸透、男女の労働の分業、現金収入の必要性、問屋制家内工業の広がりなどにより変容し始め、未婚の女性たちは農村では得られない消費財を購入するために、あるいは持参金を用意するために家を離れて工場労働者になろうとしたのだった。

(3) **リンの靴労働者**——Dublin に次いで注目されたのが、Mary H. Blewett によるマサチューセッツ州リンの靴工業についての研究 [*Men, Women, and Work: Class, Gender, and Protest in the New England Shoe Industry, 1780-1910* (University of Illinois Press, Urbana, 1988)] である⁽²⁹⁾。リンの靴労働者は「旧労働史学」の時代からかなりの注目を浴び、また「新労働史学」においては Alan Dawley と Paul Faler による注目すべき社会史的・文化史的な著作 [*Alan Dawley, Class and Community: The Industrial Revolution in Lynn*

(Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1976); Paul Faler, *Mechanics and Manufacturers in the Early Industrial Revolution: Lynn, Massachusetts, 1780–1860* (State University of New York Press, Albany, 1981)] が刊行されたが、ジェンダー分析を本格的に導入した Blewett の著作によって、リンの労働史は非常に新しい様相で姿を見せたのである。絶賛を浴びた本書の内容を時代順に整理すると以下のようになる。

靴生産における性的分業の起源は独立革命期にあった。18世紀末から19世紀初頭において商人資本家と親方職人が生産を増やすために、靴職人家族の女性に仕事を与えた。最初彼女たちには賃金は支払われなかった。しかし1810年以降になって問屋制が広い範囲に広がり、靴職人以外の家庭をも巻き込むようになると、女性に対しても労賃を支払うようになった。1830年代になると、低賃金に対する抗議が始まり、労働者は短期間ながら組合を結成した。ところが1840年代になると男性靴職人たちは労働運動における女性の役割を制限し始めた。男性は男性だけで組合を結成した。女性の利害は男性労働者の利害とは合致しなかった。1850年代になるとセントラル・ショップが出現し、新しい女性工場労働者が出現した。ミシンが使用されるようになると、リンで働くためにやってくる独身女性が増えた。彼女たちは若くて未婚で、しかもリンに親族がいなかった。他方、リン地域の問屋制下の女性労働者は年長で、既婚者が多く、その地域に親族を持っていた。

このような状況の中で1860年、それまでのアメリカ史上最大のストライキがリンで勃発した。2万人以上が2ヶ月におよぶストライキを敢行した。地方ミリシアを先頭にして女性靴工たちがリンの街路をデモしているお馴染みのイラストが本書のジャケットを飾っている。「アメリカのレディは奴隷にはなりません。私たちに公正な報酬をください。そうすれば私たちは喜んで働きます」と記した旗の下に男女が行進する図は男女労働者の連帯のイメージを鼓舞するものとして解釈されてきた。しかしブリューエットの本は連帯ではなく、分断の記述で終わっている。

ストライキは敗北に終わった。男性と女性、そして女性と女性との間の抗争が前面に出てきたのである。工場で働く男性労働者、問屋制の下で外部で働く靴職人、問屋制下で家庭で働く女性労働者、独身女性の工場労働者、多様な利害が労働者の統一を傷つけた。こうして Blewett は靴工業の内部に男女間の深い分裂が持続したことをえぐりだした。男性労働者はアーティザンの伝統に生きようとした。工場で働く女性と家庭で製靴労働を行なう女性との間にも分裂が現われた。また既婚の靴労働者、とりわけ組合靴労働者と結婚している女性または家庭で働く女性が抱いている「真の女らしさ」のイデオロギーと、独身で下宿に住む女工、または自分の賃金で家族を支えている女工たちが抱く平等権概念が対立した。自活する女性と男性扶養者に依存している女性との間の緊張関係があった。そして Blewett はこの大ストライキ以降、リンの靴労働者の歴史を1910年まで辿り、ジェンダーが労働者の抗議活動にいかにか作用したかを示したのである³⁰⁾。

(4) **スタンセルの『女性の都市』**——南北戦争以前の女性労働史に関して評判になった本に Christine Stansell, *City of Women: Sex and Class in New York, 1789–1860* (Alfred A. Knopf, New York, 1986) がある。彼女はニューヨークにおいて女性労働者のコミュニティが形成されたことを説明するが、それは「真の女らしさの崇拜」として知られる都市中産階級女性の世界とは非常に異なる世界であり、また男性労働者の世界とも異なるものであった。生産単位が世帯だった前工業的時代とは違って、工業化に伴って男性が家族を養うための収入を稼ぐ「家族賃金経済」(family wage economy) が中心となるにつれて、労働者階級家庭の内部にも性的分裂が生じ、男と女の対立が拡大する。また問屋制の拡大、衣服製造工場の成立により、苦汗工場での低賃金に苦しむ女性労働者が増大することを説明するのである。彼女の論文, “The Origins of the Sweatshop: Women and Early Industrialization in New York City,” in Michael M. Frisch and Daniel J. Walkowitz, eds., *Working Class America: Essays on Labor, Community, and American Society* (University of Illinois Press, Urbana, 1983) [pp. 78–103] は、大製造業都市となったこの時期のニューヨーク市で最も悲惨な状態に置かれたのが女性労働者だったこと、とりわけ問屋制下に編成された家庭で働く女性労働者の場合には極度の窮乏が訪れたことを描いている。

[IX] 南北戦争以降の製造業を中心に

(1) **ピッツバーグの労働者階級家族**——代表的な鉄鋼産業都市、ピッツバーグについては S. J. Kleinberg, *The Shadow of the Mills: Working-Class Families in Pittsburgh, 1870–1907* (University of Pittsburgh Press, 1989) が論じている。ここでは有給労働力は圧倒的に男性であった。鉄鋼産業の急激な拡大、鉄から鋼への転換に伴って工場における仕事は不熟練の重労働が支配的となり、移民、しかも南・東ヨーロッパ系移民の比率が拡大した。彼らは熟練によってではなく、肉体的力で評価された。1日12時間、週7日労働の物語は以前から語られてきたが、著者によれば、このような苛酷な長時間労働は家庭における長時間の苛酷な女性の労働によって支えられていた。労働者階級女性は衛生、清浄な空気と水、適切な暖房の問題に取り組み、家庭を維持し、子供を育て、下宿人をとったり洗濯をして、男性の賃金を補った。同じ鉄鋼都市のイギリスのバーミンガムで全金属労働者の4分の1は女性だったのに、ピッツバーグにはそのような女性はいなかった。産業資本主義の台頭が男性の領域と女性の領域を分離したとするならば、工業的ピッツバーグはその分離を極端にまで追いやり、女性の生活は家庭という非常にプライベートな領域に局限されていたというのである⁽³¹⁾。

(2) **トロイのカラー労働者**——他方、女性が工業労働への積極的な参加者であり、労働運動にも主体的に参加した場合があり、研究者の注目を浴びるようになった。ニューヨーク州トロイにおけるカラー産業で働く女性労働者を扱ったのが、Carole Turbin, *Working Women of Collar City: Gender, Class, and Community in Troy, New York, 1864–86*

(University of Illinois Press, Urbana, 1992)である。この町では1864年に組織されたカラー洗濯組合 (Collar Laundry Union) は合衆国における女性の最初の継続的労働組合であり、500人の組織から1880年代半ばには4000人を擁するようになり、労働騎士団に加盟した。彼女たちはアイルランド系を中心にして移民が多く、大部分が若くて独身だった。彼女たちは熟練労働者であり、比較的に賃金が高かった。そしてトロイの町の緊密なアイルランド系コミュニティが彼女たちの組合組織の基盤になっていたというのである⁽³²⁾。

(3) **カーペット労働者**——女性が活発な組合運動の担い手となった事例としてはカーペット労働者の場合もそうであり、これについては Susan Levine, *Labor's True Woman: Carpet Weavers, Industrialization, and Labor Reform in the Gilded Age* (Temple University Press, Philadelphia, 1984)がある。彼女は女性カーペット労働者を、かつて Barbara Welter が描いた中産階級の「真の女性」とは対照的な「労働者の真の女性」として描いた。機械化の進展により同産業の労働力が伝統的な男性職人から不熟練・半熟練の若い女性へと代わった時、雇い主たちは女性労働者が従順で安い労働力であることを期待したが、彼女たちは労働運動の旗の下に結集し、賃金カットと労働条件の悪化に抵抗して、1884～85年には産業規模のストライキに立ち上がり、一つの組合組織を結成し、労働騎士団に加入したのだ⁽³³⁾。

(4) **衣服労働者**——衣服産業における女性労働者が20世紀初頭に展開した活発な労働運動については、筆者も『ユダヤ移民のニューヨーク』においてかなり詳細に説明したが、ここでは Wendy Gamber, *The Female Economy: The Millinery and Dressmaking Trades, 1860-1930* (University of Illinois Press, Champaign, 1997)に触れておこう。本書によれば、衣服産業において女性は雇い主、被雇用者、そして消費者として「女性経済」を構成していたというのである。とりわけ誂え注文生産におけるドレスおよび帽子の製作の分野がそうであった。同産業において女性は主体的行為者であり、かなりの数の女性が結婚に代わるものとしてドレスと帽子の製作に従事し、自分たちの稼ぎで自活することが出来たというのである。

(5) **労働騎士団と女性労働者**——金ぴか時代の典型的な労働者組織だった労働騎士団が女性労働者にも手をさしのべたことは良く知られている。1881年女性靴工のストライキに際してスト参加女工を団員に迎え入れたのを皮きりに、女性団員数は増大し、6万5000人近くに達した。1994年綱領では「民族、性、宗教、人種によって差別してはならない」と定め、同一労働同一賃金を掲げ、女性参政権を支持した。騎士団は一種の「労働フェミニズム」(“labor feminism”)の観念を樹立したと考えられている。

(6) **南部木綿工業**——南部の産業的風景は暗かった。南北戦争後のいわゆる「新南部」に起こった木綿工業における女性労働の問題については Cathy L. McHugh, *Mill Family: The Labor System in the Southern Cotton Textile Industry, 1880-1915* (Oxford

University Press, New York, 1988)がある。南部における木綿工場の特徴は家族労働制度に基づく「工場村」(mill village)にあった。本書はこの問題についての体系的な説明を提供したもものとして評価されている。南部の工業化にあたっては従順な労働力を創出するために伝統的な南部農村白人文化の価値観と制度が利用され、農家では子供も働いたから児童を含めた世帯の中から幾人も雇用され、家族雇用と村落居住、工場内のキンシップの絆、雇い主による温情主義によって非公式福祉システムが提供されたが、労働者世帯は従属性が強かった⁽³⁴⁾。また Jacquelyn Dowd Hall, et al., *Like a Family: The Making of a Southern Cotton Mill World* (University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1987) は非常に高く評価され、ペーパーバック化されて広く読まれている。新労働史学的色彩が濃厚で、南部繊維労働者の文化、労働条件、経営者との相互作用についての我々の理解を深める本である。

【X】 専門職およびオフィスにおける女性労働者

(1) 教師——専門職における女性と言えば、何といっても教師だった。生粋アメリカ白人の若い女性が仕事を求める時、教師になることが多かった。1888年全国の教師の63%は女性であり、都市部では90%に達したが、給料は男性教師の半分以下であり、大部分は数年間勤めてから結婚した。筆者の不勉強のゆえにここに多くの文献を列挙することが出来ない。都市の教師に関して Kate Rousmaniere, *City Teachers: Teaching and School Reform in Historical Perspective* (Teachers College Press, New York, 1997)、農村女教師について Andre Wyman, *Rural Women Teachers in the United States: A Sourcebook* (Scarecrow Press, Lanham, Md., 1997)がある。なお日本においては、19世紀前半のニューイングランドの場合について、アメリカにおける近年の女性史・労働史研究、農村社会史研究の進展を踏まえて、「教職の女性化」を解明した久田由佳子の優れた論文があることを付け加えておこう⁽³⁵⁾。

(2) 政府公務員——19世紀後期には都市中産階級の単身女性が家庭の外で働き始めた。Cindy Sondik Aron, *The Ladies and Gentlemen of the Civil Service* (Oxford University Press, New York, 1987) は中産階級女性のオフィス労働への進出に連邦政府が果たした役割を指摘している。連邦政府は南北戦争中に発行した大量の紙幣を数えるために1861年に初めて女性事務員を雇った。財務省出納局長は、男性事務員の「半額の給料で女性は男性より多くの仕事を良くやるようになるだろう」と述べた。やがて連邦議会は1年600ドルという男性の半額の初任給で女性の採用を認可した。そして連邦公務員は多くの私企業よりもずっと前に週40時間労働、疾病休暇、そしてレギュラーな有給休暇を享受した。かつての独立業者という「旧」中産階級の地位から、俸給を貰う被雇用者という「新」中産階級へという中産階級の変化において連邦政府が一つの先導的役割を果たしたのである⁽³⁶⁾。

(3) オフィス労働者——一般の事務労働に関しては色々な著作が書かれた。事務労働の女性化が進展したことを強調している Margery W. Davies, *Woman's Place is at the Typewriter: Office Work and Office Workers, 1870-1930* (Temple University Press, Philadelphia, 1982) はその代表的なものであろう⁽³⁷⁾。彼女の論文, “Women's Place is at the Typewriter: The Feminization of the Clerical Labor Force,” *Radical America*, 8: 4 (July-August 1974) [pp. 1-28] は次のように論じている。19～20世紀に事務労働力の女性化が生じた。19世紀のオフィスの基本的な特徴は小さくて、ほとんど専ら男性によって占められていたことにあった。1870年合衆国における7万6639人のオフィス労働者のうち女性は1869人にすぎなかった。南北戦争以前の大部分のオフィスには2～3人の事務員しかおらず、雇い主と被雇用者との間の関係は非常に個人的なもので、事務労働は事業を学ぶ男の若者にとっての徒弟制度のようなものだった。連邦政府の場合を除き、女性が事務労働力に入りこむのは1880年代になってからだった。事務労働力における女性の比率は1880年の4%から1890年の21%に上昇した。1920年には女性は事務労働者の半分を構成した。そして1890年までにタイプライターが広く受け入れられるようになった。タイプライティングは「性中立的」(“sex-neutral”) で、新しい仕事だったので、伝統的に男性の職業とは見做されず、やがてそれは「女性の仕事」になった。こうして低レベルの事務労働の女性化が急速に進行することになった。そして事務職はそれ以外の職業よりも女性に高い賃金を支払ったから、中産階級女性がオフィス労働に入ったというのである。

この他、女性事務員については Lisa M. Fine, *The Soul of the Skyscraper: Female Clerical Workers in Chicago, 1870-1930* (Temple University Press, Philadelphia, 1990); Ileen A. DeVault, *Sons and Daughters of Labor: Class and Clerical Work in Turn-of-the-Century Pittsburgh* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1990); Elyse Rotella, *From Home to Office: U.S. Women at Work, 1870-1930* (University of Michigan Press, Ann Arbor, Mich., 1981) などがある。また19世紀後期のホワイトカラー女性労働者については Gary Cross and Peter Shergold, “We Think We Are of the Oppressed: Gender, White Collar Work, and Grievances of Late Nineteenth-Century Women,” *Labor History*, 28: 1 (Winter 1987) [pp. 23-53] がホワイトカラー女性労働者に内在した不満と戦闘性の問題を追求している。

〔XI〕 移民女性労働者についての研究

女性労働者の大部分は移民およびその第二世代から構成されたが、前述したように、ここでは短く触れるだけにしよう。女性の労働参加については彼女たちのアメリカにおける経済状況と彼女たちが故国からアメリカに持ち込んだ文化的伝統との関連があり、このことに研究者は関心を寄せてきた。代表的な事例を言えば、バッファロにおけるイタリア移民を扱った Virginia Yans-McLaughlin, *Family and Community: Italian Immigrants in Buffalo, 1880-1930* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1977), ニューハンブシャー州マン

チェスターにおけるフランス系カナダ移民女性に関する Tamara Hareven, *Family Time and Industrial Time: The Relationship between Family and Work in a New England Industrial Community* (Cambridge University Press, 1982) [タマラ・ハレーブン (正岡寛司監訳) 『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部, 1990年], そしてユダヤ系女性についての注目すべき著作, Susan Glenn, *Daughters of the Shtetl: Life and Labor in the Immigrant Generation* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1990) がある。Maxine Seller, “Beyond the Stereotype: A New Look at the Immigrant Woman, 1880–1924,” *Journal of Ethnic Studies*, Vol. 3 (Spring 1975) [pp. 59–70] は移民女性についての見方を変えるべきことを主張した短い重要な論文である。彼女によれば南欧・東欧からの移民女性については「家庭の4つの壁の内部に閉じこめられ, 世帯のルーティンに縛られて」生涯を過ごし, 父や子供よりも知的に遅れ, 英語を学ばず, 無知なままだったという否定的ステレオタイプが抱かれてきた。確かにこのようなステレオタイプに合致した女性もいたが, 著しい数の女性がそれに合致しなかったのだとして, 精力と能力をもった移民女性が存在したことを幾つもの事例を挙げて反論した論文である。黒人女性労働史の研究についても筆者はいつか書きたいと考えているが, ここでは Jacqueline Jones, *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work and Family from Slavery to the Present* (Basic Books, New York, 1985) [ジャックリーン・ジョーンズ著 (風呂本惇子, 高見恭子, 寺山佳代子他訳) 『愛と哀——アメリカ黒人女性労働史』(学芸書林, 1997年)] が画期的文献であることだけを述べておこう⁽³⁸⁾。

[XII] 終わりに

(1) 家族のための労働——Mary Ryan, [*Womanhood in America: From Colonial Times to the Present* (New Viewpoints, New York, 1975), p. 124] は「移民の妻および娘は彼女らの運命を切り開くためにではなく, 家族が食べるために働きに出かけたのであって, 個人主義的な達成感情を欲しがることは減多になかった」と述べた。筆者もまた「この時代においては女性の労働が大部分の場合, 自立を求めての労働ではなく, 家族のための労働であり, その賃金も家族の収入の一部となった」ことを指摘したことがある⁽³⁹⁾。

(2) レスリー・テントラーとケスラー・ハリスの女性労働者観——20世紀初頭の30年間についてであるが, Leslie W. Tentler, *Wage-Earning Women: Industrial Work and Family Life in the United States, 1900–1930* (Oxford University Press, New York, 1979) も女性労働にとっての限定された機会, 貧困賃金, 1日10時間労働, 単調な仕事という女性の労働環境を強調し, 彼女たちが仕事を学校と結婚との間の間奏曲と見なし, 仕事などにコミットしておらず, 結婚に憧れ, 男性とのデート, ロマンズ, そしてドレスに関心を寄せ, 賃金をめぐってボスと闘おうとはしなかったと述べ, 女性の真の場所は家庭であるというイデオロギーが女性労働者自身に大きく影響を及ぼしていたと主張した。女性労

働についてマイナス・イメージを抱かせるが、それでも女性労働の実相に迫っているという感じを抱かせる本である。これに対して対照的な捉え方をしているのが、前にも触れた Alice Kessler-Harris, *Out to Work* であろう。彼女は女性労働者の主体性を強調し、読者を励ます文章を書いたのである。

(3) **女性労働者の主体性**——筆者が紹介したように、低賃金、長時間労働、不愉快な労働条件にも関わらず、彼女たちは単なる受動的な犠牲者ではなく、工業雇用を通じて独立性を味わったことが指摘されるようになった。女性史研究が中産階級女性における明確な女性文化の存在、自律的な女性のネットワークを発見したことに触発されて、労働女性たちも資本主義的労働関係を受動的・無批判に受け入れたのではなく、権利と尊厳を守るために抗議し、闘っていることが示されるようになった。そして Tentler が分析した20世紀初頭の時期は実は未曾有の階級的対立の時代であり、筆者が論じた衣服産業などにおいては女性労働者のストライキが活発に展開されていた時期でもあったのである。

第二に、彼女たちの労働が家族のための労働であり、彼女たちの稼ぎの大部分は親の許に行ったとしても、彼女たちは自分たち自身のために些かの小遣い銭を持つことが出来たのであり、その小遣いでささやかな楽しみを求め、流行の衣服を購入することが出来たという側面にも注意が向けられた。この点は20世紀に入るとさらに著しくなるのであり、Kathy Peiss, *Cheap Amusement: Working Women and Leisure in Turn-of-the-Century New York* (Temple University Press, Philadelphia, 1986) がその面を強調した代表的著作であろう⁽⁴⁰⁾。筆者もまた『ユダヤ移民のニューヨーク』の第4章「ユダヤ共同体と移民文化」においてこのような側面をも描いた。そして古くは、ローウェルの木綿工場で働きに赴いた農家出身の女工たちも、その稼ぎを家に送金したのではなく、自分の結婚に備えての持参金としたり、本を買ったり、友人たちと都市生活を享受するのに用いたのだった。

(4) **複雑な肖像へ**——この点に関連して Ava Baron は説明する。女性の労働史家たちは最初、抑圧の条件に抵抗した歴史的主体として女性労働者を描くことに集中した。しかし女性の労働史学が成熟するにつれて、労働者階級女性の肖像はもっと複雑になった。女性の労働史家たちは抵抗の世界を発見しただけでなく、ある場合には女性は彼女たちを抑圧する諸条件を受け入れ、さらにはそのような条件を再生産するのに協力したかに見えることを見出した。女性労働者は他の女性と同盟するよりも家父長的家族および男性家族員を支持することを選ぶことがあった。例えば Blewett が描いたリンの靴労働者の研究において女性は女性工場労働者と協力するよりも、家族賃金を求める男性労働者の要求を支持した。Tentler が描いたように、多くの女性労働者が仕事よりもむしろ家族を選んだのである。抵抗と抑圧への同意という二重性をがそこに存在した。Linda Gordon もまた、女性労働に関して研究者たちの態度が振り子のように揺れてきた

ことを指摘している⁽⁴¹⁾。

このことは女性の自立と労働との関係という問題を提起する。19世紀においては多くの場合、女性の労働は自立を求めての労働ではなかった。しかし20世紀に入ると、女性労働と自立との関係をめぐって女性労働者自体の間に大きな議論が展開されてくる。これらの問題は次稿に譲ることにしよう。

註

- (1) Gerda Lerner, "New Approaches to the Study of Women in History," *Journal of Social History*, 3 (Fall 1969), reprinted in Berenice A. Carroll, ed., *Liberating Women's History: Theoretical and Critical Essays* (University of Illinois Press, Urbana, 1976), p. 349. Gerda Lerner については Linda Kerber, Alice Kessler-Harris, and Kathryn Kish Sklar, eds., *U.S. History as Women's History: New Feminist Essays* (University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1995) ["Introduction," pp. 1-14] が詳細な紹介を行なっている。
- (2) 有賀夏紀「新しい歴史の創造をめざして——アメリカ女性史研究, 最近の動向」『歴史学研究』第542号(1985年6月), pp. 61-71.
- (3) カール・デグラール他(立原宏要訳)『アメリカのおんなたち——愛と性と家族の歴史』(教育社, 1986年), 特にカール・デグラール「第一章 近代的家族はいつ現れたか」[pp. 14-54], Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood, 1820-1860," *American Quarterly*, 18: 2 (Summer 1966), pp. 151-174 [バーバラ・ウェルター「第二章 女は“女らしく”というモラルが作られた」同上書, pp. 55-91]; Linda Gordon, "U.S. Women's History," Eric Foner, ed., *The New American History* (Temple University Press, Philadelphia, 1997), pp. 263-264. また野村は『フロンティアと摩天楼』(アメリカ合衆国史②, 講談社現代新書, 第5章「女性と労働者——新しい社会史の成果」[pp. 100-104]において簡潔に説明した。
- (4) Mari Jo Buhle, "Gender and Labor History," J. Carroll Moody and Alice Kessler-Harris, eds., *Perspectives on American Labor History* (Northern Illinois University Press, DeKalb, 1990), pp. 55-79, 特に p. 58. Lynne Withey, "Women and Work in the Early Twentieth Century," *Reviews in American History*, 10: 1 (March 1982), p. 109.
- (5) Linda Gordon, pp. 258-259.
- (6) Ava Baron, Chapter 1 "Gender and Labor History: Learning from the Past, Looking to the Future," Ava Baron, ed., *Work Engendered: Toward a New History of American Labor* (Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1991), p. 2.
- (7) Susan Levine, "Class and Gender: Herbert Gutman and the Women of 'Shoe City,'" *Labor History*, 29: 3 (Summer 1988), pp. 245-246. なおアメリカ女性労働史研究の状況についての要約的説明として, Elaine Tyler May, "Expanding the Past: Recent Scholarship on Women in Politics and Work," *Reviews in American History* (December 1982), また Barbara Medosh, "Women's Work," *Reviews in American History*, 8: 3 (September 1980), p. 351. がある。また有賀夏紀(p. 67)。そして野村は『フロンティアと摩天楼』[pp. 105-110]において19世紀の働く女性を簡潔に描いた。
- (8) Barbara M. Wertheimer, *We Were There*, pp. xi-xii. 日本を訪れたこともある Alice Kessler-Harris の著書は良く知られているが, 書評として次がある。M. W. Greenwald [書評], *American Historical Review*, 89: 1 (February 1984), p. 193; Robert Zieger [書評], *Reviews in*

- American History*, 11: 2 (June 1983), pp. 186–189; Diane Lindstrom [書評], *Journal of Interdisciplinary History*, 14: 3 (Winter 1984), pp. 705–707; Carl Degler [書評], *Labor History*, 25: 2 (Spring 1984), pp. 267–269.
- (9) Ava Baron, Chapter 1 “Gender and Labor History” (pp. 1–46) はアメリカ女性労働史研究の方法論として高度の議論を展開している。
- (10) David Brody による評価は本書の裏カバーにある。その他、多くの書評で高く評価された。Ruth Milkman [書評], *Business History Review*, 64: 1 (Spring 1990), pp. 168–171; Jeremy Atack [書評], *Journal of Economic History*, 51: 1 (March 1991), pp. 247–248; Drusilla K. Brown [書評], *Journal of Interdisciplinary History*, 22: 3 (Winter 1992), pp. 477–481; Patricia A. Roos [書評], *Journal of Social History*, 25: 2 (Winter 1991), pp. 430–432. 日本でも『経済研究』（一橋経済研究所, 岩波書店, 42巻4号, 1991年10月）に Linda Grove による書評が掲載された。
- (11) 上杉佐代子「女性史の方法によせて——女性労働と性役割に関するアメリカの研究動向から」『しずおかの女たち』（静岡女性史研究会）第3集（1985年6月）pp. 83–92. 佐藤千登勢「最近のアメリカ女性労働史研究の動向」『アメリカ史研究』17号（1994年）pp. 49–59.
- (12) 野村「アメリカにおける女性の労働参加とエスニシティ——19世紀後期～20世紀初頭の時期における」『名城法学』第42巻別冊・菊地正教授還暦記念論文集（名城大学法学会, 1992年）[pp. 409–442]; 野村『ユダヤ移民のニューヨーク——移民の生活と労働の世界』（山川出版社, 1995年）
- (13) Gerda Lerner, “The Lady and the Mill Girls: Changes in the Status of Women in the Age of Jackson,” *Midcontinent American Studies Journal*, 10 (Spring 1969), pp. 5–14, reprinted in Jean E. Friedman and Willard G. Shade, eds., *Our American Sisters: Women in American Life and Thought* (Allyn and Bacon, Inc., Boston, 1973), pp. 83–93; Gerda Lerner, “Placing Women in History: A 1975 Perspective,” *Feminist Studies*, 3: 1–2 (1975), pp. 5–15.
- (14) Carl Degler, “Women,” Glenn Porter, ed., *Encyclopedia of American Economic History* (Charles Scribners, New York, 1980), pp. 997–998.
- (15) Sheila T. Lichtman [書評], *Labor History*, 23: 1 (Winter 1982), pp. 137–141.
- (16) E. T. May, pp. 222–223. なお主婦労働の問題をめぐるでは日本では1950年代後半に「主婦論争」が活発に展開された。安川悦子「日本型企業社会と家族問題」[社会政策叢書編集委員会編『日本型企業社会と社会政策』啓文社, 1994, pp. 31–34] 参照。
- (17) Susan Geiger [書評], *Labor History*, 34: 1 (Winter 1993), p. 126.
- (18) Baron, p. 15; Linda Gordon, pp. 270–272. ただしリンド（中村八朗抄訳）『ミドルタウン』（青木書店, 1990年）の叙述からは、1920年代のマンシーにおける労働者の家にはそのような菜園を設ける面積上の余裕はなかったように見える。
- (19) 野村『ユダヤ移民のニューヨーク』p. 97.
- (20) Theresa M. McBride [書評], *Journal of Social History* (Spring 1980), pp. 510–512. なおリンド・K・カーバー, ジェーン・シェロン・ドゥハート編（有賀夏紀・杉森長子・瀧田桂子・能登路雅子・藤田文子編訳）『ウィメンズ・アメリカ——論文編』（ドメス出版, 2002年）には本書の一部分が篠田靖子により「週7日——家事奉公」として翻訳（pp. 101–104）されている。
- (21) Carol Lasser [書評], *Journal of Social History* (Fall 1983), pp. 160–163; A. Burchell [書評], *Journal of American Studies*, 17: 1 (April 1983), p. 116; Barbara Medosh, “Historians and the Servant Problems,” *Reviews in American History*, (March 1983), pp. 55–58.
- (22) Daniel Sutherland [書評], *American Historical Review*, 89: 1 (February 1984), p. 206; Julie

- Matthaei [書評], *Labor History*, 25: 4 (Fall 1984), pp. 577-578.
- (23) Joyce S. Petersen [書評], *Journal of American History*, 76: 2 (September 1989); Lynn Weiner [書評], *Journal of Economic History*, 49: 2 (June 1989), pp. 512-513.
- (24) Glenda Riley [書評], *American Historical Review*, 89: 1 (April 1984), pp. 548-549.
- (25) Edith Blicksilver [書評], *Journal of Ethnic History*, 1: 2 (April 1982), pp. 99-100.
- (26) Annette Atkins [書評], *American Historical Review* (April 1992); Dorothy Rudy [書評], *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, No. 522 (July 1992), pp. 182-184.
- (27) Thomas Dublin, "Women, Work, and the Family: Female Operatives in the Lowell Mills, 1830-1860," *Feminist Studies*, 3: 1-2 (Fall 1975), pp. 30-39; Thomas Dublin, "Women, Work, and Protest: 'The Oppressive Hand of Avarice Would Enslave Us,'" *Labor History*, 16: 1 (Winter 1975), reprinted in Milton Cantor and Bruce Laurie, eds., *Sex, Class, and the Woman Worker* (Greenwood Press, Westport, Conn., 1977), pp. 43-63.
- (28) 上杉佐代子「アメリカ婦人労働史への社会史的アプローチ——トマス・ダブリン著『働く婦人たち』を中心に」『婦人労働問題研究』(1984年2月号) pp. 58-60; 久田由佳子「工場制度成立期におけるロウエルの女工たち——その生活と労働——」『アメリカ研究』第29号(1995年) pp. 229-239.
- (29) Blewett, p. xv; Gary J. Kornblith [書評], *Journal of Interdisciplinary History*, 20: 2 (Autumn 1989); John T. Cumbler [書評], *Journal of Social History*, 23: 8 (Spring 1990); Nancy Folbre [書評], *Journal of Economic History*, 49: 1 (March 1989), pp. 226-227; Joe McCartin [書評], *Business History Review*, 64: 4 (Winer 1990), pp. 769-770; Gary Kulik [書評], *Journal of American History*, 76: 1 (June 1989), pp. 246-247; Peter M. Ostenby [書評], *Labor History*, 30: 4 (Fall 1989), pp. 622-623.
- (30) Susan E. Hirsch [書評], *American Historical Review*, 93: 2 (April 1988).
- (31) John T. Cumbler [書評], *Journal of Economic History*, 50: 3 (September 1990), pp. 765-767. また Susan J. Kleinberg, "Technology and Women's Work: The Lives of Working Class Women in Pittsburgh, 1870-1900," *Labor History*, 17: 1 (Winter 1976), pp. 58-72.
- (32) Nancy Gabin [書評], *American Historical Review*, (February 1994), p. 306.
- (33) Thomas Dublin [書評], *Journal of American History*, 72: 2 (September 1985), p. 421; Lynn Y. Winer [書評], *Labor History*, 26: 3 (Summer 1985), pp. 457-458.
- (34) David Carlton [書評], *Business History Review* (Spring 1990), pp. 163-165; Lee Ann Whites [書評], *Journal of Southern History*, 55: 4 (November 1989), p. 735.
- (35) 久田由佳子「教職の女性化——学校教師と女工——19世紀前半ニューイングランドの場合」[田中きく代・高木(北山)真理子編著『北アメリカ社会を眺めて——女性軸とエスニシティ軸の交差点から』(関西学院大学出版会, 2004年)第5章, pp. 123-144]。また西部の女性教師に関しては篠田靖子『アメリカ西部の女性史』(明石書店, 1999年)第5章「フロンティアで活躍した女性教師」(pp. 73-102)がある。
- (36) Dee Garrison [書評], *Journal of Social History* (Fall 1977), pp. 191-192; Richard R. John, Jr. [書評], *Business History Review*, 63: 1 (Spring 1984), pp. 196-197.
- (37) Margarete Walsh [書評], *Journal of American Studies*, 18: 1 (April 1984), p. 113.
- (38) 黒人奴隷女性労働者については西出敬一「アメリカ黒人奴隷制研究と奴隷の女性史」『アメリカ研究』第26号(1992年3月, pp. 40-65)がある。
- (39) また野村「アメリカにおける女性の労働参加とエスニシティ」pp. 435-436.
- (40) 本書の一部は能登路雅子によってリンダ・K・カーバー他編『ウィメンズ・アメリカ』

(pp. 105-118) に「流行のスタイルで気取って」として翻訳されている。

(41) Ava Baron, p. 27; Linda Gordon, p. 259.

